

前線書籍販売の関連団体について：公的機関と民間の出版業者

竹岡，健一
鹿児島大学法文学部人文学科：教授

<https://doi.org/10.15017/2229674>

出版情報：九州ドイツ文学．32，pp.15-29，2018-10-31．VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



前線書籍販売の関連団体について

— 公的機関と民間の出版業者 —

竹 岡 健 一

1. はじめに

小論は、一般に「前線書籍販売」(Frontbuchhandel)と総称される、第二次世界大戦下のドイツで前線兵士のためになされた本の販売とナチスの文芸政策のかかわりに関する研究の一部をなすものである。拙論「第二次世界大戦下のドイツにおける＜前線書籍販売＞について——研究の意義と観点」¹⁾で述べた通り、本研究は大きく「関連団体」、「実施状況」、「本の内容」という三つの観点から構成されている。小論では、これらのうち最初の観点を取り上げ、前線書籍販売に携わった関連団体の活動を詳しく把握すると同時に、その特色の一つとして、統一性の欠如という点を明らかにする。

ところで、ドイツにおける前線書籍販売の関連団体は、大きく公的機関 (Institution) と民間の出版業者 (Privatverlag) の2つに区別され、前者には、前線書店センター (Zentrale der Frontbuchhandlungen)、国防軍 (Wehrmacht)、啓蒙宣伝省 (Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda) の3つが含まれる。個別の考察に先立ち、これらの団体が担った主な役割と相互関係を大まかに示すと、図1のようになる。²⁾ まず、大前提として、前線における本の販売は、ドイツ国内における本の販売と完全に切り離されていた。つま

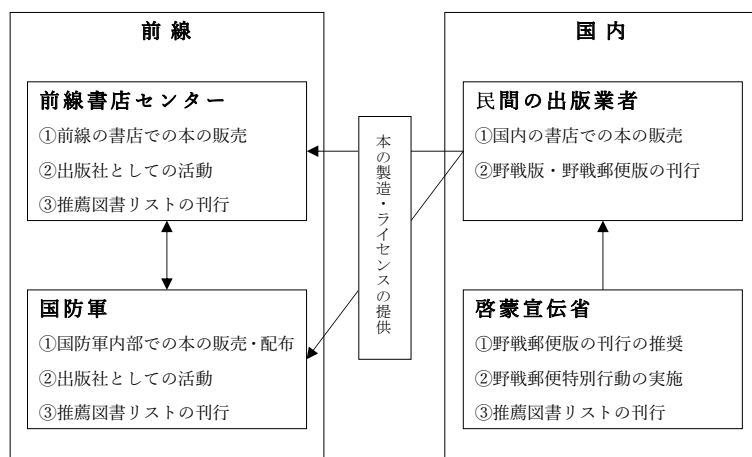


図1 前線書籍販売の関連団体の主な役割と相互関係

り、前線での本の販売は、もっぱら前線書店センターと国防軍に委ねられ、他の書籍販売業者が介入する余地はなかったのである。また、前線で書籍販売の主な役割を担ったのは前線書店センターであった。前線書店センターは、本部はベルリンにあったが、前線での移動販売や書店による本の販売を、ほぼ独占的に司ったのである。これに対し、国防軍の場合は、出版活動を行いはしたが、本の販売は軍の内部に限定され、販売というよりも無償で配布されるようなケースも見られた。一方、民間の出版業者は、前線での本の販売に直接かかわることはできなかったが、前線書店センターと国防軍で販売ないし配布される本の製造やそのためのライセンスの提供などを行った。また、主に国内の書店で販売され、野戦郵便によって無料で前線兵士に送付される「野戦版」(Feldausgabe) ないし「野戦郵便版」(Feldpostausgabe) と呼ばれる本の刊行を行った。そして、啓蒙宣伝省は、民間の出版業者に対して野戦郵便版の刊行を推奨したり、「野戦郵便特別行動」(Sonderaktion Feldpost) を実施するなどした。

2. 前線書籍販売の公的機関

(1) 前線書店センター

ポーランド侵攻から間もない1939年10月17日、書籍商組合(Börsenverein der Deutschen Buchhändler)の主任で帝国著作院の副院長でもあったヴィルヘルム・パウアー(Wilhelm Baur)から、ドイツの書籍販売に対して次のような声明が発せられた。

前線書店の設立について

ドイツの書籍販売に、今、新たな課題が生まれた。西部要塞線と北海で歩哨に立っている、またはポーランドでの出撃後に旧戦闘地域の駐留用兵舎に入った兵士らに、読み物が供給されねばならない。ナチス的な統治の意味で指揮されたドイツの書籍販売にとって、これは共通の課題である。³⁾

パウアーはさらに、翌年2月24日の追加の声明の中で、「たとえ現地の軍当局から許可されようと、個々の会社が前線地域で書籍販売の企業を組織することは、決して許されない」⁴⁾と述べ、前線での本の販売がもっぱら前線書店のみに認められることを明確にした。

このように前線での本の販売を独占した前線書店の本部である前線書店センターの取締役会は、ドイツ労働戦線(Die Deutsche Arbeitsfront)、帝国著作院(Reichsschrifttumskammer)、国防軍総司令部(Das Oberkommando der Wehrmacht)、啓蒙宣伝省、および書籍商組合の代表者によって組織されていたが、最も中心的な役割を担ったのはドイツ労働戦線であった。というのも、前線書店センターはドイツ労働戦線の出版社であるハンザ同盟出版社(Hanseatische Verlagsanstalt)とランゲン＝ミュラー社によって組織されており、必要な資金もドイツ労働戦線から供給され、センターの活動全体を指揮したのがドイツ労働戦線の出版社の経営責任者エーバーハルト・ヘッフェ(Eberhard Heffe)なら、前線書店の主任を務

め、販売される本の選択に責任を負ったのもドイツ労働戦線の出版社の支配人エルンスト・トレットウ (Ernst Tretow) だったからである。⁵⁾ また、前線書店センターへの本の供給は、委託販売業者 (Kommissionär) が請け負った。とりわけ、エーア＝コンツェルン (Eher-Konzern) に属するライプツィヒのリューエ商会 (Lühe & Co.)、フォルクマル＝コンツェルン (Volkmar-Konzern) に属するライプツィヒのフェルナウ社 (Fernau)、およびその姉妹会社であるシュトゥットガルトのヘルマン・シュルツェ社 (Hermann Schultze) である。⁶⁾

1939年10月17日のバウアーの声明の後、12月13日に、約3500冊の本を運搬できるように改造されたバスによる最初の移動販売が西部戦線へ派遣され、その数は1940年4月までに9つに増やされた。また、1940年6月のフランス降伏以後は、占領地域に店舗も作られ、その数は、1942年までに60、1943年末には98にまで増やされた。⁷⁾ 前線書店の店員は、当初は民間の書店員であったが、1941年3月からは国防軍の兵士に取って代わられた。とりわけ、1909年以前の生まれで、書籍販売の教育を受けている者である。だが、1943年以後は、男性店員を戦闘に従事させる必要から、危険の少ない地域では、書籍販売の短期教育を受けた赤十字の女性が店員を務めた。⁸⁾ このような前線書店では、本の販売だけでなく、兵士の気晴らしのために、朗読、講演、演劇、音楽会なども催されたが、そうした活動を効果的に実施するために、例えば啓蒙宣伝省の下部組織であるドイツの著作のための宣伝・助言局 (Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum) から、「詩人の朗読のための提案リスト」 (Vorschlagsliste für Dichterlesungen) といったものも刊行されていた。⁹⁾

そしてさらに、1943年以後、前線書店センターは、国防軍総司令部と共同で、出版活動を実施するようになる。つまり、国防軍または前線書店センターとしてライセンスを取得し、ドイツまたはブリュッセル、パリ、プラハ、ノルウェーといった国外の占領地域の出版社を利用して、自己資金で本を製造・出版し、前線書店で販売するのである。¹⁰⁾ ライセンスを提供した出版社は、ベック (Beck)、ブロックハウス (Brockhaus)、コッタ (Cotta) など30社以上にのぼる。また、このような形で刊行された本は、紙の不足が深刻化する時期であるにもかかわらず、すべて本格的な装丁がなされ、表紙と裏表紙の内側に、「国防軍のための前線書籍販売版」 (Frontbuchhandelsausgabe für Wehrmacht) という文字が入った装飾がつけられた。こうした前線書店センターの出版社としての活動に対しては、書籍商組合の主任という立場でバウアーから異議が唱えられた。というのも、本の出版が書籍商組合の管理の及ばないところでなされ、ドイツの出版社の利益を損なうことが懸念されたからである。¹¹⁾ だが、結果としては、状況を変えるには至らなかった。

なお、前線書店センターでは、図書推薦リストとして、1941年に「前線書店センター図書一覧」 (Schriftumsverzeichnis der Zentrale der Frontbuchhandlungen) が刊行されたが、そこには、「ナチズム」、「世界観」、「人種学」、「四か年計画」、「経済と技術の重要人物」、「国防軍と軍人」、「政治と歴史」、「世界史」、「詩と演劇」、「小説と物語」、「娯楽」、「ユーモア」、「北欧文学の翻訳」、「文化史」、「写真」、「歌曲」、「遊戯」、「雑誌」、「故郷への贈り物」といった区分の下で、約2,600のタイトルが記されていた。¹²⁾

(2) 国防軍

すでに触れたように、国防軍の出版活動の最も重要な組織は国防軍総司令部、より厳密に言えば、国防軍総司令部・国内課（Oberkommando der Wehrmacht Abt. Inland）だが、その他、空軍総司令部（Oberkommando der Luftwaffe）、海軍総司令部（Oberkommando der Marine）、国家弁務官統治区域（Reichskommissariat）、占領地域の軍司令官（Armeebefehlshaber in den besetzten Gebieten）、陸軍の宣伝課（Propagandaabteilung der Armeen）なども、それぞれに特別なシリーズや特別版を刊行した。また、それらは小売書籍販売も書籍取次業も介さず、前線に直接供給され、前線書店で販売または配布されると同時に、各地の部隊管理の出張所や所轄の司令所等でも販売された。こうした国防軍の出版社としての活動については、啓蒙宣伝省は反対しなかったと思われるものの、前線書店センターの場合と同じく、書籍商組合の主任パウアーは異議を唱えた。ドイツ的著作のための宣伝・助言局の主任ヴィルヘルム・ヘーゲルト（Wilhelm Haegert）宛ての1943年4月10日の書簡から明かなように、パウアーの懸念は、多くの出版社が紙の配給を得やすい国防軍との交渉を優先し、啓蒙宣伝省や書籍商組合のコントロールが効かないところで多数の本が出版されることにあったが¹³⁾、やはり状況を変えるには至らなかった。国防軍の出版社活動において刊行された本の代表的なものとしては、1939年から刊行された「国防軍総司令部の背囊図書」約90タイトルと、1941年末頃から刊行された「国防軍総司令部の兵隊文庫」127タイトルがあげられる。¹⁴⁾

国防軍総司令部・国内課では、1939年から1941年にかけて「国防軍のための本」（Bücher für die Wehrmacht）というタイトルで図書推薦リストが毎月刊行された。本は「特に重要」（Besonders wertvoll）と「問題なし」（Keine Bedenken）の2段階に区別され¹⁵⁾、1939年には前者の評価が約50冊、後者の評価が約550冊であった。¹⁶⁾ 本は、「歴史」、「戦争と軍人」、「ポーランドでの進軍」、「西側の列強との戦い」、「イギリスとの戦いのなかで」、「植民地」、「現代の諸問題」、「ドイツの芸術」、「辞書」といった項目にまとめられており、前線書店センターの推薦リストや後に述べる啓蒙宣伝省のそれと比べると、戦争を意識した傾向が強く窺われる反面、娯楽文学的な要素は欠如していた。¹⁷⁾

(3) 啓蒙宣伝省

以上の前線書店センターと国防軍の活動がもたらした前線での本の販売にかかわり、相互に関連し合っていたのに対し、啓蒙宣伝省の役割は、主に国内の民間の出版業者の活動に関係している。第二次世界大戦勃発後間もなく、ドイツの出版社が前線兵士向けの本の生産に着手した最初のきっかけは、1939年10月14日に、アルフレート・ローゼンベルク（Alfred Rosenberg）が、ドイツの出版社と小売書籍販売に兵士のための本の寄付を呼びかけたことにあった。¹⁸⁾ この事業のために、総統の委託によるナチスの世界観教育全般のための著作保護中央局（Hauptamt für Schrifttumspflege beim Beauftragten des Führers für die gesamte weltanschauliche Schulung der NSDAP）、通称ローゼンベルクの著作保護局（Amt Schrifttumspflege Rosenberg）の主任ハンス・ハーゲマイヤー（Hans Hagemeyer）が、本の提案リストをまと

めた。最初の寄付は1939年10月から1940年4月まで実施され、1.050万部の本が提供され、それらは選別されて約38の部隊へ送られた。この活動によって、1944年までに前線で戦う兵士や野戦病院などに寄贈された本の総数は、4,300万冊以上にのぼるとされるが、寄付が最初に呼びかけられた段階で、対象となる本は一般の書店で販売されている本であったことから、前線兵士向けの本の需要を商機と捉えたドイツの出版社、とりわけ戦争が短期に終結しないと考えた出版社は、自社の本をそれに合わせて商品化し、「野戦版」や「野戦郵便版」と呼ばれる、野戦郵便に合せて包装された本の生産を開始することになったのである。例えば、戦後ベルテルスマン社で印刷主任を務めたローラント・ゲック (Roland Göck) は、当時の様子を次のように回想している。なお、ヨハネス・バンツハーフ (Hohannes Banzhaf) は、当時の同社の指導陣の一人である。

ヨハネス・バンツハーフは、「野戦版」、つまり流行の本の特別安価な仮綴じ版の製造にすぐさまとりかかるべきだと提案した。それに対し、当初は、この考えを実現するには数週間を要し、その間に戦争は終わってしまうだろうとの異議も唱えられたが、結局はこのアイデアに対する違和感は消え、即座に行動することが決定された。

1939年の秋のうちに、最初の野戦版が完成した。1.50マルクの価格は、間もなく1.20マルクに引き下げられた。希望により、複数の本がボール箱に入れられ、発送の準備が整った形で提供された。野戦郵便は、これらの本を無料で運んだ。¹⁹⁾

こうした状況を受けて、啓蒙宣伝省は、1940年春、ドイツの出版社に対して、野戦郵便版の生産を推奨した。書籍商組合の機関誌『ベルゼンブラット』(Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel) の同年4月23日の記事によれば、ヴィルヘルム・ヘーゲルトは、同組合の総会の式辞で、次のように述べた。

戦争が始まって数日のうちに前線書籍販売が組織され、ドイツ兵に読み物が供給されました。ドイツ兵がいるいたところで、移動前線書店も活動し、必要な休息の時間をすぐれた興味深い本の読書で満たす機会を彼らに与えています。党の著作課からは、大がかりな本の収集が実施されました。ドイツの書籍販売も大いにそれに関与し、今や、国外の戦地に、私たちの兵士らのための文庫の基礎が固められました。しかし、これらの文庫は依然として十分ではなく、決して満たされることがありません。そのため、私たちは故郷から前線への本の送付を大いに推奨しました。「前線に本を送れ！」という宣伝活動は全国民の間に反響を呼び、私たちの部隊に読み物を供給することに貢献しました。ありがたいことに、多くの出版社は、国防軍に喜ばれる、小さくて扱いやすい大きさの野戦郵便版の生産へと移行しました。この措置が他のドイツの出版社にも広まることが望まれます。(強調は原文)²⁰⁾

しかし、この問題に対する啓蒙宣伝省の介入がより踏み込んだものとなるのは、1942年

に開始された野戦郵便特別行動においてである。ヘーゲルトは、同年6月9日、ドイツの出版社に対して次のような通達を出した。第1に野戦郵便版の重量は100グラム以内とすること、第2に厚紙装丁を廃止し、すべて仮綴じとすること、第3に大部の本は複数の巻に分割すること、そして第4に、出版社は、以上の条件で野戦郵便版の生産に着手し、本に「野戦郵便版」という刷り込みを入れる場合に限って、紙の配給を受けられるといったことである。²¹⁾ この通達には、不足する紙の割り当てをより厳格に行うとともに、刊行される本の事前検閲を行うという意図も込められていた。また、上記の前線書店センターと国防軍の場合とは違い、こうして刊行された野戦郵便版は、小売書籍販売で自由に販売された。この特別行動には、ベルテルスマン社、エーア社、コールハマー社を始め少なくとも70の出版社が関与し、およそ3,000万冊の本が生産された。²²⁾

なお、啓蒙宣伝省も、ごくわずかだが前線のための独自の出版活動を行っている。一つは、「オストラント中隊文庫」(Ostland-Kompanie-Bücherei)と呼ばれる、オストラント国家弁務官統治区域の国防軍司令官付宣伝課のためのシリーズであり、ゲッベルスと当地の大管区指導者ローゼ(Lohse)の寄付により、「バルト三国で冬を越す部隊の精神的な世話」²³⁾のために、1941年末から1942年にかけて、35タイトル、総数2,500部の本がリガで刊行された。もう一つは、「国防軍のためのゲッベルス博士の寄贈図書」(Dr. Goebbels-Spende für die Wehrmacht)と呼ばれるシリーズであり、1942年に、約50タイトル、総数約5万部が刊行され、様々な分野の学問的な著作が多く含まれている点に特色があった。²⁴⁾

さらに、啓蒙宣伝省でも、ドイツ的著作のための宣伝・助言局によって、1940年に総数1,500タイトルを含む2つの「野戦郵便図書リスト」(Buchfeldpostlist)が²⁵⁾、1941年には約350タイトルを含む第3のリストと約300タイトルを含む第4のリストが刊行された。例として第3のリストの項目をあげると、「政治と経済の力の場」、「不滅の軍人」、「娯楽と省察のために すべての人々のための小説」、「ごく手短に 小さな物語」、「背囊のための知恵 すべての人々の状況のための偉人の思想と名言」、「楽しい時間のために 陽気な小説と物語」、「異国の土地に流れるドイツの血 ドイツの植民者の運命」、「犯人はだれだ? わくわくする探偵小説」、「冒険と旅 全世界からの報告と物語」、「運動家と狩猟家のために 記録の世界と自然の生活から」といったものであり、政治や世界観、戦争にかかわる本とならんで、気晴らしのための本も多数含まれていた。²⁵⁾

3. 民間の出版業者

前線兵士のための本の生産に関与した出版社は100を越えるが、すべてが一様に関与したわけではなく、生産された本のかかなりの部分は特定の出版社に集中していた。表1は、100万部以上という特に多くの本を生産した10社の名前と生産数をリストアップしたものだが²⁶⁾、これらの出版社の生産数の合計は6,482万冊となり、1939年から1945年の間に前線兵士のために生産された本の総数とされる7,500万冊の約86パーセントを占める。²⁷⁾ また、上位4社の生産数の合計は5,300万冊で、全体の約70パーセントを占め、第1位のベルテル

表1 前線書籍販売に関与した主な出版社と本の生産数

1	C. Bertelsmann Verlag, Gütersloh	1.900万部
2	Zentralverlag der NSDAP Franz Eher Nachf., Berlin/München	1.400万部
3	W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart	1.000万部
4	Bibliographisches Institut, Leipzig	1.000万部
5	C. Gerber (Münchner Buchverlag), München	400万部
6	Insel Verlag, Leipzig	190万部
7	Reclam Verlag, Leipzig	190万部
8	Eugen Diederichs Verlag, Jena	172万部
9	Gauverlag Bayerische Ostmark, Bayreuth	120万部
10	Langen-Müller Verlag, München	110万部
合 計		6.482万部

スマン社にいたっては、1社だけで全体の約25パーセントを占めているのである。

それでは以下、表2に基づき、これらの出版社が前線書籍販売向けにどのようなシリーズの本を刊行していたのかを確認することにより、民間の出版業者の活動を概観したい。²⁸⁾ なお、表2にあげた各出版社の本の生産数の合計は必ずしも表1にあげた数と一致しないが、これは資料によって数値に幅があることによるものであり、前線書籍販売のための出版活動の正確な把握が困難であることの表れでもある。例えばベルテルスマン社の場合だと、まだ把握されていないものも含めると、総数は2.100万部にまで達するとの指摘もなされているのである。²⁹⁾ また、表2の中央にあげた図書シリーズについては、印のないものが各出版社の野戦版ないし野戦郵便版、○、△、□のついているものが、それぞれ前線書店センター、国防軍、啓蒙宣伝省の出版活動によるものである。さらに、シリーズ名の右の()内の数字は、把握しうるタイトル数である。

①ベルテルスマン社

上記のように、前線兵士のための本の生産において他を圧倒したベルテルスマン社では、「野戦版」、「小さな野戦郵便シリーズ」、「野戦郵便小冊子」、「ハンス・グリムの野戦郵便版」、「国防軍総司令部のための兵隊文庫」、「空軍総司令部のための特別版」、「武装親衛隊と警察のための特別版」が刊行されたが、最初の3つのシリーズの刊行数が非常に多いことが特徴である。このうち「野戦版」は1939年から刊行され、「小さな野戦郵便シリーズ」と「野戦郵便小冊子」は、1942年の野戦郵便特別行動以後に刊行された。他方で、ベルテルスマン社の場合には、国防軍関係の本の生産がきわめて少ないことも特徴である。

②エーア社

ナチスの中央出版社であるエーア社では、1939年から「兵隊＝僚友」という野戦郵便シリーズが、その後「フェルキッシャー・ベオーバハター野戦郵便」というシリーズが刊行された。前者には野戦郵便版の刷り込みはなされなかったが、それが野戦郵便版であることは、「私たちが<兵隊＝僚友>というタイトルを持つ最良の娯楽文学シリーズを刊行した

のは、私たちの野戦郵便図書が大きな共鳴を得たからです」という出版社の告知によって明らかにされた。³⁰⁾ また後者の場合、わずか4タイトルしか含まれておらず、1作品の刊行数がきわめて高いことが特徴であり、いずれも1943年の一年間だけでも100万部に達した。

③コールハマー社

コールハマー社では、1939年から、「我らが兵士のための彩り豊かな小冊子」という、120以上のタイトルを含む野戦郵便シリーズが刊行された。このシリーズは、裏表紙に野戦郵便の住所を記すためのスペースを印刷し、本の郵送を容易にした最初の事例であった。³¹⁾

④書誌学研究所

書誌学研究所では、野戦郵便版のほか、「マイアー・イラスト入り小冊子」、「国防軍総司令部の背囊図書」、「国防軍総司令部の兵隊文庫」、「陸軍の武装小冊子」が刊行されたが、約1000万部の大部分は背囊図書と兵隊文庫によって占められており、ベルテルスマンとは反対に、国防軍との結びつきが非常に強い出版社であった。

⑤ゲルバー社

ゲルバー社は、1940年から「ミュンヘンの小冊子」と呼ばれる野戦郵便版を刊行し、併せて「国防軍総司令部のための兵隊文庫」を3巻刊行した。

⑥インゼル社

インゼル社では、人気のあるインゼル文庫の野戦郵便版と前線書籍販売版に加え、国防軍の「部隊の世話のための冊子」が刊行された。

⑦レクラム社

レクラム社は、「レクラム百科文庫」、「レクラム小冊子シリーズ」、「空軍指揮幕僚監部のための特別版」を刊行した。ベルテルスマン社と同様、レクラム社も1939年から野戦郵便という言葉を使用した。同社の特徴は、「レクラム百科文庫」が「理想的な形で野戦郵便小冊子の諸条件を満たし」³²⁾、サイズや重量の変更をせずとも、そのまま野戦郵便版として利用できた点にあった。そして、2週間ごとに同文庫の2つのナンバーを直接野戦郵便の住所に送付するというサービスが提供されると同時に、レクラム文庫の5つから100のナンバーが、ケースに収められ、野戦郵便による発送の準備が整った状態で販売された。³³⁾ 他方で、レクラム社は、ベルテルスマン社やインゼル社とは異なり、野戦郵便特別行動への参加は1942年のみにとどまった。³⁴⁾

⑧ディーデリヒス社

ディーデリヒス社は、戦前から人気のあった「ドイツ・シリーズ」を基に野戦郵便版を刊行したほか、前線書店センターと国防軍と啓蒙宣伝省の出版活動による本も多数刊行しており、前線書籍販売にかかわった民間の出版業者の活動としてきわめてバランスの取れた事例となっている。前線書店センターのための版には、前線書籍販売版のほかに、パリとプラハとリガの前線書店センターのための版も含まれ、国防軍のための版には「国防軍総司令部の兵隊文庫」、「武装親衛隊と警察のための特別版」、「親衛隊経済局のためのライセンス版」、「ノルウェー国防軍司令官のためのライセンス版」が含まれる。そして、啓蒙宣伝省の出版活動による版は、上述の「オストラント中隊文庫」と「国防軍のためのグッ

ベルス博士の寄贈図書」である。

⑨ バイエレン・オストマルク大管区出版社

バイエレン・オストマルク大管区出版社では、「バイロイト野戦郵便版」と「小さな鐘文庫」という2つの野戦郵便版のシリーズが刊行された。前者は『ベルゼンブラット』の編集長ヘルムート・ランゲンブーハー（Hellmuth Langenbucher）によって編集されたが、野戦郵便版としては珍しくきわめて丈夫な装丁が特徴である。³⁵⁾ また、後者は野戦郵便特別行動に合わせて刊行されたものと思われる。³⁶⁾

⑩ ランゲン＝ミュラー社

ランゲン＝ミュラー社では、定評のあった「小さなシリーズ」が野戦郵便版として刊行された。なお、同社は、1943年にはエア出版社に合併された。³⁷⁾

以上のように見ると、これら10社の活動内容も様々であり、自社の野戦版と野戦郵便版に高い比重をおく出版社もあれば、国防軍の出版活動を請け負うことを重視した出版社もあり、一つのシリーズで多数のタイトルが刊行されるケースもあれば、ごく少数のタイトルにもかかわらず高い刊行数が達成されたケースもあることがわかっていく。

表2 主な出版社の図書シリーズと生産数

出版社	図書シリーズ	本の生産数 (概数)
	印のないものは野戦版または野戦郵便版 ○印は前線書店センターの出版活動によるもの △印は国防軍の出版活動によるもの □印は啓蒙宣伝省の出版活動によるもの () 内は把握しうるタイトル数	
ペルテルスマン社	野戦版 Feldausgaben (40)	6.600.000
	小さな野戦郵便シリーズ Kleine Feldpost-Reihe (87)	5.200.000
	野戦郵便小冊子 Feldposthefte (73)	7.000.000
	ハンス・グリムの野戦郵便版 Feldpostausgaben von Hans Grimm (3)	60.000
	△国防軍総司令部のための兵隊文庫 Soldatenbücherei des OKW	80.000
	△空軍総司令部のための特別版 Sonderausgaben für das OKL (5)	5.000
	△武装親衛隊と警察のための特別版 Sonderausgaben für die Waffen-SS und die Polizei (9)	11.000
エーア社	兵隊＝僚友 Soldaten-Kameraden (70程度)	10.000.000
	フェルキッシャー・ベオーバハター野戦郵便 Völkischer Beobachter-Feldpost (4)	5.000.000
コールハマー社	我らが兵士のための彩り豊かな小冊子 Bunte Hefte für unsere Soldaten (Feldpostausgabe) (120程度)	10.000.000

書 誌 学 研 究 所	野戦郵便版 Feldpostausgaben (2)	10.000.000
	マイアー・イラスト入り小冊子 Meyers Bild-Bändchen (4)	
	△国防軍総司令部の背囊図書 Tornisterschriften des OKW (20程度)	
	△国防軍総司令部の兵隊文庫 Soldatenbücherei des OKW (45～50)	
	△陸軍の武装小冊子 Waffenhefte des Heeres	
ゲ ル バ ー 社	野戦郵便版 (ミュンヘンの小冊子) Felspostausgaben (Münchener Lesebogen)	4.000.000
	△国防軍総司令部の兵隊文庫 Soldatenbücherei des OKW (3)	
イ ン ゼ ル 社	野戦郵便版 (インゼル文庫) Feldpostausgaben (Insel-Bücherei) (56)	2.300.000
	○前線書籍販売版 Frondbuchhandelsausgaben	
	△部隊の世話のための冊子 Truppenbetreuungsexemplare	230.000
レ ク ラ ム 社	レクラム百科文庫 Reclams Universal-Bibliothek (48)	1.580.000
	レクラム小冊子シリーズ Reclams Reihenbändchen (37程度)	不明
	△空軍指揮幕僚監部のための特別版 Sonderdruck für den Luftwaffenführungsstab	10.000
ディーデリヒス社	野戦郵便版 (ドイツ・シリーズ) Feldpostausgaben (Deutsche Reihe) (28程度)	705.000
	○前線書籍販売版 Frontbuchhandelsausgaben (52程度)	415.000
	○パリ前線書店センターのためのライセンス版 Lizenzausgaben für die ZdF Paris (4)	20.000
	○プラハ前線書店センターのための版 Auflagen für die ZdF in Prag (2)	20.000
	○リガ前線書店センターのための版 Auflagen für die ZdF in Riga (1)	5.000
	△国防軍総司令部の兵隊文庫 Soldatenbücherei des OKW (3)	225.000
	△武装親衛隊と警察のための特別版 Sonderausgaben für die Waffen-SS und die Polizei	145.000
	△親衛隊経済局のためのライセンス版 Lizenzausgaben für das SS Wirtschaftsamt	20.000
	△ノルウェー国防軍司令官のためのライセンス版 Lizenzausgaben für den Wehrmachtbefehlshaber Norwegen	145.000
	□オストラント中隊文庫 Ostland-Kompanie-Bücherei (4)	10.000
	□国防軍のためのゲッベルス博士の寄贈図書 Dr. Goebbels-Spende für Wehrmacht (50)	50.000

バイエルン・ オストマルク 大管区出版社	バイロイト野戦郵便版 Bayreuther Feldpostausgaben (50程度)	1.250.000 ～1.500.000
	小さな鐘文庫 Kleinen Glockenbücherei (30程度)	不明
ランゲン＝ ミュラー社	野戦郵便版 (小さなシリーズ) Feldpostausgabe (Kleine Reihe)	1.100.000

4. おわりに

以上、第二次世界大戦中のドイツにおいて前線書籍販売に携わった公的機関と民間の出版業者の活動を跡づけてきた。活動全体についても、個々の団体の活動についても、今後さらに詳しい考察が必要だが、小論を締めくくるにあたり、アメリカの事例とごく簡単な比較を試みることによって、ドイツにおける前線書籍販売の特色の一つとして、統一性の欠如という点を明らかにしたい。

モリー・グプティル・マニング (Molly Guptill Manning) によれば³⁸⁾、アメリカでは、当初はアメリカ図書館協会 (American Library Association) が中心となって「戦勝図書運動」 (Victory Book Campaign) が実施されて、1800万冊の寄贈図書が兵士に供給され、その後は、戦時図書審議会 (Council on Books in Wartime) によって1億2,300万冊の「兵隊文庫」 (Armed Services Edition) が製造・供給された。これらの本の合計は1億4,100万冊で、ドイツの7,500万冊の1,9倍となり、アメリカのほうが遥かに多くの本が供給されたと思われる。だが、アメリカの人口がドイツのおよそ2倍であることを考慮すれば³⁹⁾、前線に送られた本の量、ひいては活動全体の規模には、実質的にはそれほど大差はないと言えよう。

これに対し、組織の点では、両国の活動には大きな違いがあるように思われる。まず、アメリカの場合、それはきわめて一元的なものとなっていた。1941年から実施された戦勝図書運動は、一般から本の寄付を募るものだが、アメリカ図書館協会を中心に、ルーズベルト大統領からの後押しもあって、軍と政府が一体となり、アメリカ軍慰問協会 (United Service Organization) とアメリカ赤十字 (American Red Cross) からも活動資金を得て実施された。また、1943年から戦勝図書運動に取って代わった戦時図書審議会によるペーパーバックの供給も、軍と政府が一体となって実施された。刊行された本も規格が統一された「兵隊文庫」のみに絞られ、製作管理者はポケット・ブックス社 (Pocket Books, Inc.) 編集長のフィリップ・ヴァン・ドレン・スターン (Philip van Doren Stern) が務め、表紙の印刷はコマンディ・ロス・カンパニー社 (Commanday-Roth Company) が一手に手掛け、5つの印刷会社⁴⁰⁾が低価格で本の印刷を請け負った。

このように、アメリカにおいて前線兵士への本の供給が国全体で一元的になされたのに比べると、ドイツの場合は、多様である反面、かなり統一性を欠いていた。この点について、ハンス＝オイゲン・ビューラー (Hans-Eugen Bühler) とクラウス・キルバッハ (Klaus Kirbach) は次のように述べている。

戦争勃発とともに、まったく新しい書籍市場が瞬く間に成立したが、その整備と発展に、関係者は様々なスピードと様々なやり方で貢献した。またその際、上記の公的機関は、利害が異なる立場から行動した。そのようにして権限が様々な部署に配分されたり移されたりしたことによって、前線へもたらされる著作物は、開戦当初から様々な生産者（民間の出版社、国防軍、政府機関）を持ち、部分的に競合する様々な部局によって管理・販売され、結果として、前線兵士のための本が様々な経路をたどってもたらされることになったのだ⁴⁰⁾。

こうした指摘は、小論で跡づけた関連団体の活動状況と確かに一致する。前線での本の販売は前線書店センターが一元的に管理するというのが建前ではあったが、実際には、軍も販売や配布を行ったし、民間の出版業者でも前線への送付に適した本が多数刊行された。また、前線書店センターと軍は、書籍商組合の反対を無視して、ともに出版社としての活動も行ったが、特に後者については、軍全体としてのまとまりもなく、個々の師団や部隊が独自に本を刊行した。さらに、啓蒙宣伝省も出版社としての活動を行った。そして、前線書店センターと軍と啓蒙宣伝省は、それぞれが独自の推薦図書リストを刊行した。加えて、前線で販売される本の生産に関与した出版社も、それぞれが公的機関と個別のかかわりを持ちながらも独自の本の生産を行い、本の装丁等についても、野戦郵便特別行動によるものを除いては統一が図られなかった

もちろん、紙の配給や本の内容に関する管理や相互の協力関係がまったくなかったというわけではない。だが、このように見ると、ドイツにおける前線書籍販売の関連団体の活動はかなり不統一な形で実施され、すべての関連団体が自己の関心や利益を優先して活動する余地を持っていたことがわかるのである。このような認識は、ドイツにおける前線書籍販売の特色の一端に過ぎないものの、しばしば「統制」や「独裁」という言葉で表されるナチス・ドイツの一元的で厳格な管理のイメージとは相容れないという意味で、きわめて興味深いものであろう。

本研究は、日本学術振興会科研費助成事業（基盤研究（C）、課題番号：17K02621、細目：ヨーロッパ文学、細目表キーワード：独文学・独語圏文学）の助成を受けたものである。また、小論は、日本独文学会西日本支部研究発表会における口頭発表「前線書籍販売の関連団体について」（2017年11月26日 於山口大学）の原稿に加筆修正したものである。

注

- 1) 拙論「第二次世界大戦下のドイツにおける〈前線書籍販売〉について——研究の意義と観点」（『かいろす』の会『かいろす』第55号、2017年、56～66頁）を参照。
- 2) 図1は、筆者が独自に作成したものである。
- 3) Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel. (1939) 242, S. 689. Zitiert nach Bühler,

- Edelgard/Bühler, Hans-Eugen: Der Frontbuchhandel 1939—1945: Organisationen, Kompetenzen, Verlage, Bücher: eine Dokumentation. Frankfurt am Main (Buchhändler-Vereinigung GmbH) 2002, S. 88.
- 4) Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel. (1940) 47, S. 61. Zitiert nach Bühler, Hans-Eugen/Kirbach, Klaus: Die Wehrmachtsausgaben deutscher Verlage von 1939—1945. Teil 1: Feldpostausgaben zwischen 1939 und 1945 und die Sonderaktion Feldpost 1942. In: Archiv für Geschichte des Buchwesens. Band 50. Frankfurt am Main (Buchhändler-Vereinigung) 1998, S. 251—294, hier S. 253.
 - 5) Vgl. Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 14, 88.
 - 6) Vgl. ebenda, S. 107f.
 - 7) Vgl. ebenda, S. 90.
 - 8) Vgl. ebenda, S. 91—94.
 - 9) Vgl. ebenda, S. 36ff., 94.
 - 10) Vgl. ebenda, S. 101—107.
 - 11) Vgl. ebenda, S. 103f.
 - 12) Vgl. ebenda, S. 26f; Bühler, Hans-Eugen/Kirbach, Klaus, a. a. O., S. 254f.
 - 13) Vgl. Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 113f.
 - 14) Vgl. ebenda, S. 184—197.
 - 15) Vgl. Oberkommando der Wehrmacht, Abt. Inland (Hrsg.): Bücher für Wehrmacht. 15. Februar 1939, Nr. 1, A (Besonders wertvoll), S. 1; dasselbe (Hrsg.): Bücher für Wehrmacht. 15. Februar 1939, Nr. 1, B (Keine Bedenken), S. 1.
 - 16) Vgl. Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 32.
 - 17) Vgl. ebenda.
 - 18) Vgl. ebenda, S. 16, 87.
 - 19) Gööck, Roland: Bücher für Millionen. Fritz Wixforth und die Geschichte des Hauses Bertelsmann. Gütersloh (Bertelsmann Sachbuchverlag) 1968, S. 71.
 - 20) Haegert, Wilhelm: Schrifttum und Buchhandel im Kriege. In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel. (1940) 94, S. 148—152, hier S. 148f.
 - 21) Vgl. Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard: Bertelsmann im Dritten Reich. München (Bertelsmann) 2002, S. 411; Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 118f.; Bühler, Hans-Eugen/Kirbach, Klaus, a. a. O., S. 257f.
 - 22) Vgl. Bühler, Hans-Eugen/Kirbach, Klaus, a. a. O., S. 262.
 - 23) Bundesarchiv Berlin, R 56 V/30, S. 162/163. Zitiert nach Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 203.
 - 24) Vgl. ebenda, S. 213ff.
 - 25) Vgl. Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum beim Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda, Berlin (Hrsg.): Sendet Bücher an die Front.

Buchfeldpostliste. 3. Folge. 1941.

- 26) 表1の典拠は、次の通りである。Vgl. Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard, a. a. O., S. 423.
- 27) Vgl. ebenda, S. 424; Schönfelder, Gerhard: Buchhandel in der Entscheidung. In: Unseren Kameraden bei der Wehrmacht diese Mitteilungen der Reichsschrifttumskammer. November 1944, S. 1—4, hier S. 3.
- 28) 表2の内容、および以下の説明の典拠は、次の通りである。Vgl. Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard, a. a. O., S. 417ff., 422f.; Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 133—197.
- 29) Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard, a. a. O., S. 419.
- 30) Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel. (1939) 283, S. 963f. Zitiert nach Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 179.
- 31) Vgl. Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard, a. a. O., S. 422.
- 32) Löschenkohl, Bernhard: Büchlein in der Tasche des Waffenrocks. In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel. (1943) 170, S. 195—198, hier S. 197.
- 33) Vgl. Bühler, Edelgard/Bühler, Hans-Eugen, a. a. O., S. 163f.
- 34) Vgl. ebenda, S. 167.
- 35) Vgl. ebenda, S. 174.
- 36) Vgl. ebenda.
- 37) Vgl. Friedländer, Saul/Frei, Norbert/Rendtorff, Trutz/Wittmann, Reinhard, a. a. O., S. 423.
- 38) Cf. Manning, Molly Guptill: When books went to war. The stories that helped us win World War II. Boston/New York (Mariner Books Houghton Mifflin Harcourt) 2014.
- 39) ドイツの人口に対するアメリカの人口は、1900年に4.300万人対7.600万人で1,77倍、1925年に5.500万人対1億1.500万人で2,09倍、1950年に7.000万人対1億5.000万人で2,14倍となり、この間の平均は2倍となる。Cf. McEvedy, Colin/Jones, Richard: Atlas of world population history. London (Allen Lane) 1978, p. 69, 287.
- 40) Bühler, Hans-Eugen/Kirbach, Klaus, a. a. O., S. 251.

Über die Organisationen des Frontbuchhandels

— Institutionen und Privatverlage —

Ken-ichi TAKEOKA

Diese Abhandlung ist ein Teil der Forschung über die Beziehung zwischen dem Frontbuchhandel und der Literaturpolitik des Nazis und behandelt vor allem die Organisationen des Frontbuchhandels. Als Institutionen kommen die Zentrale der Frontbuchhandlungen (ZdF), die Wehrmacht und das Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda (RMVP) in Betracht.

Nun war der Buchmarkt an der Front damals von dem in der Heimat ganz getrennt. Und den Buchvertrieb an der Front betreute die ZdF fast monopolistisch. Der Betrieb der ZdF wurde besonders von der Deutschen Arbeitsfront (DAF) unterstützt. Die ZdF veröffentlichte 1941 eine eigene Buch-Empfehlungsliste und fungierte sogar auch als Verleger.

Neben der ZdF nahm die Wehrmacht an dem Vertrieb und der Verteilung der Bücher an der Front teil. Aber die Tätigkeiten der Wehrmacht wurden in kleine Teilabschnitte untergeteilt: das Oberkommando der Wehrmacht (OKW), das Oberkommando der Luftwaffe (OKL), das Oberkommando der Marine (OKM), Divisionen, Reichskommissariat usw. Alle diese Gruppen fungierten als Verleger. Das OKW veröffentlichte von 1939 bis 1941 eigene Buch-Empfehlungslisten.

Der Wirkungskreis des RMVP umfasste es hauptsächlich die Heimat. Das RMVP empfahl den Privatverlagen die Feldpostsendungen und führte ab 1942 die „Sonderaktion Feldpost“ durch. Das RMVP veröffentlichte 1940 und 1941 die „Buchfeldpostlisten“.

Mehr als 100 Privatverlage nahmen am Frontbuchhandel teil. Sie stellten verschiedene Buchreihen der obengenannten drei Institutionen her oder boten ihnen die Lizenzen dafür an. Dazu gaben sie die sogenannte „Feldausgabe“ und „Feldpostausgabe“ heraus, die in der Heimat vertrieben und mit der Feldpost umsonst an die Frontsoldaten befördert wurden. Die Gesamtzahl der im Frontbuchhandel hergestellten Bücher betrug ca. 75 Millionen. Aber ca. 86% davon stellten nur 10 Privatverlage her. Das heißt C. Bertelsmann, Franz Eher, W. Kohlhammer, Bibliographisches Institut, C. Gerber, Insel, Reclam, Eugen Diederichs, Gauverlag Bayerische Ostmark und Langen-Müller. Die Buchreihen dieser Privatverlage und deren Produktionszahl werden in dieser Arbeit ausführlich aufgelistet.

Schließlich werden die Charakteristika der Organisationen des deutschen Frontbuchhandels im Vergleich zur Situation in den USA betrachtet. So waren die Tätigkeiten der Organisationen des deutschen Frontbuchhandels ziemlich uneinheitlich, während die Versorgung der Bücher für die Frontsoldaten in den USA im ganzen Staat einheitlich durchgeführt wurden. Jede Institution und jeder Privatverlag hatte eine bestimmte Bewegungsfreiheit. Das widerspricht interessanterweise der verbreiteten Vorstellung der einheitlichen Kontrolle NS-Deutschlands, die oft mit dem Wort „Diktatur“ oder „Gleichschaltung“ ausgedrückt wird.